

平成 29 年度 学校評価実施報告書

視点	4 年間の目標 (平成 28 年度策定)	1 年間の目標	取 組 の 内 容		校 内 評 価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価 (3月30日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①基礎学力の育成を軸に、社会的・職業的に自立できる人間の育成に向け、教育課程の工夫・改善に取り組むとともに、授業力を高めるための組織的取組みをすすめる。</p> <p>②学校行事や生徒会活動における生徒の主体的な活動の促進を図る。</p>	<p>①授業改善のための研究会を年数回実施し、生徒が主体的・協働的な学びを通して基礎学力を身に付けるための工夫を進める。</p> <p>①基本の定着を図るための田奈ゼミ、発展的な内容に意欲的に取り組む生徒のための進学研究会を通して基礎学力の育成を図る。</p> <p>①生徒の実態に合わせた教育課程の編成・授業の工夫・教育環境の整備を行う。</p> <p>②学校行事により主体的に参加し、仲間との協働的な活動を通じて人間力の育成を図る。</p>	<p>①教員だけによる研究会を複数回実施することで、外部講師を招聘して行う研究会の質を高める。</p> <p>①田奈ゼミ及び進学研究会の取組みを年間を通して組織的にすすめる。</p> <p>①教育課程の見直し及び授業の相互見学を通して、授業の工夫点等を共有する。</p> <p>①生徒にとって、スムーズに授業に取り組めるような指導・環境整備を行う。</p> <p>②各行事において中心となる生徒の意見・活動を重視しながら、一部の生徒だけでなく、全校生徒が主体的に行事に参加できるような環境を整える。</p>	<p>①教員だけで実施する研究会を何回実施したか。</p> <p>①田奈ゼミと進学研究会を教員間の連携を図って実施したか。</p> <p>①教育課程の見直しを行ったか。</p> <p>①授業の工夫点を共有できたか。</p> <p>生徒がより授業に集中して取り組むことができたか。</p> <p>②生徒の行事への参加率。</p> <p>②体育祭の応援団、文化祭の有志団体、駅伝大会の参加人数。</p>	<p>①学習活動研究会を3回実施、うち1回は麻布教育研究所長の村瀬先生を招聘し、生徒のやる気を引き出す工夫について研究した。</p> <p>①田奈ゼミは前期11回、後期16回、学年末テスト対策として4回行った。また朝と放課後に進学研究会を行い、進学を目指す生徒へ指導を行った。</p> <p>①高校生活へのスムーズな移行をめざし、平成30年度入学生からの教育課程見直しを行った。</p> <p>①「学び合い」をテーマとした研究授業を実施した。</p> <p>①HR教室側面にホワイトボードを設置し、伝達事項をそちらに掲示するようにした。前面の黒板周りに授業以外の情報が掲示されないようにした。</p> <p>②体育祭、文化祭の欠席率はそれぞれ6.0%、11.0%であった。</p> <p>②応援団については各団それぞれ20名前後と、かなり安定した参加者数となっている。駅伝大会の参加者数は169名、ボランティアで携わった生徒数は27名であった。有志参加ではあるが、PTAとも連携した、本校の名物行事として充実したものにしている。</p>	<p>①継続した授業改善を進めるために、テーマを設定した学習活動研究会を企画していきたい。</p> <p>①田奈ゼミボランティアの確保が難しい。進学研究会については学習支援体制をさらに強化していく必要がある。</p> <p>①外国につながる生徒への個別対応授業の状況を共有して次年度の支援に生かせるようにする必要がある。</p> <p>①研究授業後のフィードバックの時間を十分に確保する必要がある。</p> <p>①生徒に伝える情報をわかりやすく視覚化するなど、ユニバーサルデザイン化をさらに進める必要がある。</p> <p>②今年は悪天候の影響もあり、文化祭の欠席率がやや高かったが、行事をきっかけにして充実した学校生活を送れるよう、生徒への早めの働きかけを促していきたい。</p> <p>②行事に対する各生徒の取組状況は年々よくなってきている。今後は生徒会役員が企画・運営を担うところまで持っていきたい。</p> <p>②授業時間数を確保しながら、どのように学校行事を実施していくか、内容の精選も含めて検討する必要がある。</p>	<p>・小学校ではワークショップ型の授業研究会を実施している。研究会は様々な工夫を凝らすことが必要である。</p> <p>・学習に困難を抱える生徒を発見し、支援するまでのプロセスを整理する必要がある。</p> <p>・授業と図書館が連携する機会を今以上に増やせるとよい。</p> <p>・田奈ゼミボランティアをびっかりカフェに派遣するなど、生徒にとって田奈ゼミ以外の学びの場を用意したらどうか。</p> <p>・他の教科の授業を見ることは大事。板書や力の入れ方などの違いが参考になる。</p> <p>・できる生徒とできない生徒の差が激しい。授業をできない生徒に合わせることで、できる生徒への対応が難しくなる。</p> <p>・生徒の進路に応じて学びに柔軟性を持たせることは大切である。</p> <p>・教室にホワイトボードを設置する取組には感心した。良い取組である。</p>	<p>・授業改善のための研究会の方法を工夫し、質の高い研究をすることができた。</p> <p>・田奈ゼミはボランティアの確保が難しく、個別対応型の学習形態の維持に課題が残った。進学研究会は参加生徒は少ないものの年間を通して行うことができた。</p> <p>・行事の欠席率は高くなったが、行事に対する各生徒の取組状況は年々よくなってきている。</p>	<p>・生徒に情報をわかりやすく伝えるため、教室環境の整備、指示の工夫等の研究をさらに進める。</p> <p>・授業以外の学びの場の在り方について検討を進める。</p> <p>・学校に来ることが楽しいという気持ちを作るには行事は重要である。行事をきっかけにして充実した学校生活を送れるよう、生徒への早めの働きかけを促し、全校生徒が主体的に行事に参加できるような環境を整えていきたい。</p>
2 生徒指導・支援	<p>①生徒一人ひとりが抱える課題を的確に把握し、きめ細かい個別支援を行うための仕組みづくりを進める。</p>	<p>①教職員が生徒と向き合う時間を確保し、生徒理解に努めるとともに、きめ細かな個別指導・支援に向けた教職員の資質向上のための体制づくりを図る。</p>	<p>①休み時間等授業以外における生徒とのコミュニケーション機会を充実させ、情報を共有する。</p> <p>①会議・研修事業のスリム化を図る。</p> <p>①SC、SSW、SCCをはじめ、外部人材の活用及び情報連携を図る。</p>	<p>①職員室、学年室等における職員間の情報共有及び連絡黒板等の活用の度合い。</p> <p>①会議・研修事業の回数、時間。</p> <p>①SC、SSW、SCC等の活用実績。</p>	<p>①特に1年生は常時学年室の連絡黒板等を用い、一人ひとりの課題を共有して、きめ細かい支援を行った。</p> <p>①稟議、朝の打ち合わせ等を活用して企画会議、職員会議の短縮を図ったが、生徒指導案件の増加で特別会議の回数が増加してしまった。</p> <p>①SCはほぼ毎週、面接枠が埋まる状況であった。SSWもほぼ毎回フルタイムで活用する状況であった。</p>	<p>①課題を抱えた生徒を取り巻く状況が複雑化・深刻化しており、教員間での情報共有が難しくなっている。</p> <p>①特に企画会議では稟議を増やし、会議の効率化をさらに図る必要がある。</p> <p>①外部機関との連携の機会が飛躍的に増えており、情報整理に追われている状況がある。適切に人材を配置し、スムーズな連絡体制を構築する必要がある。</p>	<p>・中退者をどこかにつなげてからやめさせることが大切である。その取組を成果にあげてもいいのではないか。</p>	<p>・生徒一人一人の抱える困難が年々大きくなっており、対応に苦慮している中で、生徒を支援するため教職員、連携する外部機関が「チーム田奈」として対応している。</p>	<p>・担任、学年と連携している外部資源との間をコーディネートする仕組みを工夫し、「チーム田奈」の組織力をさらに高めていく。</p>

	視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価(3月30日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		達成状況	課題・改善方策等
		②部活動における生徒の主体的な活動に向けた支援を進める。	②部活動の活性化に向け、全校生徒の4割程度が部活動に加入することを旨とし働きかけを行うとともに、部活動指導のための体制・環境を整える。	②各顧問が活動場所で指導できる時間を確保し、生徒の日々の活動を重視し、評価する。また、各行事や対外試合における部員の活躍を学校全体で共有し、評価することで部活動に継続して参加する生徒を増やしていく。	②年度末の部活加入率が4割程度。 ②途中退部者の減少。	②部員数は少ないが、意欲的に活動しており、各種行事にも積極的に協力し、行事成功の原動力となっている。	②経済的に苦しい家庭が多く、部活動に加入できない生徒が多い。年度当初に1年生を対象として実施している「部活動体験デイズ」の機会を増やしたり、活動状況を積極的に広報したりして、「魅力ある部活動」を内外に発信していく必要がある。		・年度末の部活加入率は目標の4割に届かなかったが、参加している生徒は意欲的に活動しており、各種行事の活性化の原動力となっている。	・年度初めの「部活動体験デイズ」をきっかけに部活動に参加するよう新入生に対して学年全体で積極的な声かけを行っていく。
3	進路指導・支援	生徒の実態やニーズを的確に把握し、個人の努力のみで達成できない社会的バリアの除去を含む視点からの支援を併せて行うとともに、そのための仕組みづくりを進める。	生徒一人ひとりが適性や資質に見合う進路を選択することにより、社会的自立を実現できるよう多角的な支援を行う。またそのための仕組みづくりを継続する。	・担任以外に就職・進学担当者も個別面談やワークショップを実施し、ミスマッチのない進路実現の支援を行う。 ・社会的バリアを持つ生徒に対しては、キャリア支援センターを通じて外部機関と連携し、進路実現を図る。	・進路決定状況。 ・進路未決定者の減少。	・38期生の進路状況は就職50%、進学35%、未定15%である。 ・横浜市と連携し、在校生、卒業生、中退者を対象とする介護プログラムを実施するなど、生徒の進路支援を充実させることが出来た。 ・3学年対象の「さくら咲くキャリア教室」では、SCCの尽力により地域事業所等と連携し、職場体験や校内ワークショップなどを一層充実させることができた。	・生徒・保護者の多様化にともない、今後一層困難な支援事例の増加が予想される。校内の支援に係る時間と協力体制を充実させ、グループと学年の連携を深めつつ、効果的なプログラムを構築する必要がある。 ・進路指導についての若手教員のスキルを向上させる必要がある。SCCとも連携しながら、キャリア支援に係る様々な仕組みを理解するための研修を実施する。	・キャリア支援センターの敷いた就職までのレールに乗れない生徒をどのようにしていくのか。柔軟に使える外部資源は使っていくという発想をすれば、進路未決定者を減らせるのではないか。	・キャリア支援センターは横浜市はじめ外部と連携を強め、SCCの強力な支援もあり、個々の生徒に応じた支援ができています。一方困難な支援事例が増加しており、対応に苦慮している。	・進路支援と生徒相談、生徒支援との間をシームレスにし、生徒の持つ困難の早期発見、早期支援の取組をさらに進めていく。
4	地域等との協働	地域の様々な社会資源との協働を通して、地域に根ざした学校づくりを進めるとともに、地域貢献活動を充実させる。	地域の外部機関との連携を軸に、生徒の社会的実践力を向上させるための機会を充実させる。	・地域貢献活動など、地域社会への参画の機会を設定する。 ・緑法人会等の外部機関と連携し、キャリア教育、就職支援を行う。	・地域貢献活動の取組み状況。 ・職場見学体験、3年面接指導(8月)等の実施状況。	・地域清掃は3回、のべ210名が参加した。また麻布養護学校プールボランティアにのべ20名、こどもの国で行われたイベントや青葉区民祭り、介護施設慰問等に生徒が参加した。 ・職場見学体験では40名以上の欠席者があり、一部については別の日に体験日を設定していただくことになった。	・参加依頼が来ても参加する生徒が集まらないことが多い。部活動やアルバイトで都合がつかない場合も多いが、生徒への積極的な呼びかけが必要と思われる。 ・入学後夏休み前までの意識付けの方法に工夫が必要である。普段の欠席・遅刻に対する指導も併せていく必要がある。	・テニス部が恩田小学校生徒にテニスの指導したのは良い取組である。今後も継続をお願いする。 ・学校に来ることが楽しいという気持ち作りが重要である。 ・今年度のべ236名のボランティアがびっくりカフェに参加している。このような数字も成果にあげたほうがよい。	・緑法人会等の外部連携、びっくりカフェや田奈ゼミに係る多くのボランティアとの協働が本校生徒支援の大きな力となっている。	・新入生について、入学当初から積極的に対話による信頼関係づくりに努め、学校に来ることが楽しいと思える環境整備を行う。
5	学校管理 学校運営	学校が抱える課題に対して、教職員が意欲を持ち、主体的に教育に取り組めるための「生き生きとした職場づくり」を図る。	組織的な業務遂行をさらに推進しつつ、ベテラン教職員と若手教職員が切磋琢磨する機会を充実させ、人材育成につなげる。	・初任者研修において指導教員のみならず、多くのベテラン教職員との研修の機会を充実する。 ・生徒の個別対応時において、複数対応を原則としながら、指導のノウハウ等を継承する。	・初任者研修におけるベテラン教員の助言回数。 ・担任・副担任の配置、グループ内業務分担の工夫及び個別対応時のペアリングの配慮。	・初任者研修の指導教員・教科指導員による校内研修として週2回、それ以外にも時に応じて多くの教員が助言をし、人材育成につなげた。 ・担任・副担任の配置は、本校経験の浅い教員同士が組まないよう配慮した。 ・グループ業務は来年度以降の引継ぎを考え、複数で作業を確認しながら行った。	・個別対応時のペアリングについては、対応できる教員の数が不足する時も多く、徹底することはできなかった。	・生徒たちの行動の背景にあるものをいかにして捉えるか、そうしたスキルを身に付けられるようにしてほしい。	・教員同士のコミュニケーションを増やし、オンザフライミーティングを充実させ、ノウハウの継承を図ったが、教職員の入れ替わりが激しく、田奈高校の生徒支援を継承することが難しい。	・新着任者のガイダンスを工夫し、チーム体制で対応していくことで、田奈高校の生徒支援のノウハウを伝承していく。